

すずき・たけし

1957年生まれ/東京大学卒業/同大学院博士課程単位取得退学/建築計画・環境行動研究/博士(工学)
共著に「建築計画読本」「人間-環境系のデザイン」ほか

032

Special Feature

「このたび、大阪府で計画しました千里ニュータウンは、大阪の中心部より約15軒(キロメートル)、時間にして約30分のところにあり、しかも国鉄、京阪神の交通幹線が集まる地域に近い吹田市北部、豊中市東部にまたがる丘陵地帯1,200万平方メートル(約350万坪)で、自然の風美を生かし変化に富んだその地形は住宅地として絶好の環境にあり、近來他に類を見ない夢のニュータウンとして総合的に開発されております。この計画においては地域全体を12の地区に分け、各地区ごとに各種の住宅は勿論、これらの居住者の利便に供する文教施設、近隣センター、診療施設、緑地公園等が計画的に配置され、上下水道施設の完備は申すまでもなく交通機関としては、阪急千里山線の延長の確定、地下鉄の乗り入れ計画および地域内環状バスの運行、その他主要路線の整備等特に教育、厚生、衛生各方面に亘る総合的な配慮がとられております」。

この力強い文章は、大阪府千里丘陵分譲住宅の販売パンフレットに掲載されたものである。宣伝文句である点は割り引いても、開発者としての誇りと並々ならぬ自信を読み取れるが、実際、千里ニュータウンはそれに値するプロジェクトであった。

日本で最初のニュータウン(当初は千里丘陵住宅開発と呼ばれていた)である千里ニュータウンは、1958(昭和33)年に開発決定、1961(昭和36)年に起工。佐竹台住区から建設が始まり、万国博覧会の開催された1970(昭和45)年に事業終了した。わずか10年たらずで、北大阪の副都心としての役割も持つ計画人口15万人(3万戸)の住宅都市を建設したこと自体が偉業と言ってもよいが、千里は、近隣住区理論、生活圏段

階構成論、ラドバーン方式による歩車分離とクドサク、コミュニティ形成を意図した囲み型の住棟配置、近隣センター、医者村、斬新な小学校の計画やデザインなどなど、新しい理論と提案によって計画された先進的・総合的な「実験都市」であった。

先進性、総合性ととも、公共がイニシアティブをとって進め実現した計画であることもあらためて強調しておきたい。住宅は府営、公社、公団の公共賃貸住宅が約6割を占める。また計画開発の記録映画「ひらけゆく千里丘陵」をみると、当時の切迫する住宅不足の状況のなかで、単なる団地ではない総合的に計画された住宅地が必要であること、そのために専門家たちが総力をあげて取り組んでいることを訴えており、大阪府の自信と信念を強く感じられる。

計画にあたっては、住宅公団から京都大学西山研究室に委託された北大阪丘陵地帯開発計画に関する研究をはじめ、国会、日本都市計画学会や、東京大学の高山研、吉武研、大阪市立大学、大阪府立大学などに調査研究が委託され、その成果はマスタープランや施設計画に反映されていった(幼低校、医者長屋のように実現しなかった提案も多かったが)。千里の開発のなかで生まれた新住宅市街地開発法をはじめとする数々の計画・設計の技術やノウハウは、その後のニュータウンや地域計画の基礎となった。千里ニュータウンは近代的な計画論のマイルストーンであった。

初期に入居した住民のお話をうかがうと、計画者の意気込みに応えたかのように、新しいまちに期待して千里を選んだりベラベラな意識の方が多いことを感じる。彼らは少し戸惑いながら

も新しい空間を使いこなして生活を楽しみ、自治会や地域行事をつくり上げ、当初の計画で不足していた文化施設等を要求・実現し、駐車場や建替問題で住環境に働きかけて千里を故郷にしていった。吹田市、豊中市の住宅地管理や自治会活動の考え方の違いもあり、12の住区は各々個性をもった社会環境として成熟している。ニュータウンにも確実に歴史が刻まれているのである。

千里ニュータウンへの批判として、自立型都市でなく産業・働く場がほとんどないこと、車社会への未対応、近隣住区・段階構成への疑問、世帯構成・人口減少の問題(1975[昭和50]年が人口ピーク12.9万人)などさまざまな指摘があるが、最大の問題は老朽化や社会の変化に対応する住環境更新の仕組み(主体、手続き、技術)が十分準備されていなかったことであろう。このことは建設以上にエネルギーが必要な集合住宅建替えや、高齢社会へ対応した近隣センター整備など、住環境の再構築の時期を迎えた今、深刻な問題として浮かび上がっている。おりしもこの時期に、建設を担った公は、財政難や「官から民」というかけ声のなかで、役割を終えたと認識したかのように千里から手を引きつつある。管理と運営を担当してきた大阪府千里センターは2005(平成17)年10月に解散し、泉北センターと共に大阪府タウン管理財団に統合された。千里中央センタービル(横文彦氏設計)は、千里中央地区再整備事業によって今まさに解体されつつあり、跡地には50階のタワーマンションが建つ。

近年の集合住宅の建替えのほとんどが普通の板状の高層マンションであり、当初の住区構造と異なり閉鎖的に

なっているのを見ると、住環境全体をコントロールする主体の不在を感じざるを得ない。現在千里には数々の地域NPOが生まれ活発な活動が行われている。居住者全員の合意による建替えの実現や、近隣センター空店舗における街角広場の運営、建築・景観協定など、注目すべき成果も多いが、ニュータウンほどのスケールの住宅地やインフラの再構築を行う主体となるには至っておらず、諸外国のような専門性・計画力を持つノンプロフィットな仕組みが成立するまでにはもう少し時間がかかりそうである。文化遺産としてのモダニズム建築DOCOMOMO JAPAN 100選にも選ばれた千里ニュータウンであるが、このままだと、この20世紀の偉大な住宅都市計画の資産は取り崩され、かつて千里という夢のまちがあったということになりかねない。大阪府をはじめとする「公」には先達の「誇り」を思い起こしての今しばらくの踏ん張りを願う。

参考文献

- 1——『千里ニュータウンの建設』/大阪府/1970
- 2——片寄俊秀/『千里ニュータウンの研究』/長崎総合科学大学/1979
- 3——山地英雄/『新しきふるさと——千里ニュータウンの20年』/学芸出版社/1982
- 4——住田昌二(編)/『日本のニュータウン開発』/都市文化社/1984
- 5——『千里ニュータウンの総合評価に関する調査研究』/1984
- 6——佐藤健正/『ニュータウンの40年とその今後』/都市住宅学/No.30/2000

注

A——2006年4月22日から6月4日まで、吹田市立博物館(<http://www.suita.ed.jp/hak/>)において市民参加による「千里ニュータウン展——ひとまちくらし」が開催される。

図1[左]| 初期地域施設計画模式図

図2[中]| 開発計画図

写真1[右]| 完成当時の風景

